

2022年横浜ナザレン教会降誕節第六主日(1/30)礼拝

「祈りつつ待つ」

使徒言行録第1章9節から14節・説教原稿

【聖書】

使徒言行録 1:9 こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。10 イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、11 言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

12 使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。13 彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。14 彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。

1 人の時代感覚と神の時代

中島みゆきに「時代」という曲があります。「回る、回るよ、時代は回る。喜び、悲しみ繰り返す。今日は倒れた旅人たちも生まれ変わって歩き出すよ。」という歌です。ご存じの方もおられるでしょう。ぐるぐると回る歳月が人の傷を癒す、慰めに満ちた歌詞のように聞こえます。が、いつまでたっても人間の本质は変わらない、と歌っています。つまり、立ち上がった旅人も又倒れ伏す、同じところをぐるぐる回るのは虚しい事です。この歌詞のように、人の罪の世は、同じことを繰り返します。それがこの世の現実だと思えます。

しかし、神の目から、神に生かされている者の目から見ればどうでしょうか。聖書が語る神の救いの歴史は、三つの時代に分けられる、と言われています。天の御神の定めた、特別で後戻りできない「神の時」によって区切られた神の三つの時代であり、同じところをぐるぐる回っている人間の時代とは決定的に異なります。最初の時代は、真の救い主を待ち望む時代、旧約聖書に描かれています。そして、待ち望んだ救い主、神の独り子が真の人として私達の間にも宿られ、十字架に架かり、三日目に復活させられる事で私達人間の罪を贖い、その救いを成し遂げてくださった時代。ある神学者は、この主イエスが地上にあり十字架と復活の出来事を成し遂げてくださった時代を、「時の中心」と印象深く語りました。聖書では福音書に記されています。そして、主イエス・キリストが御父の御許に帰り、代わりの助け主として、聖霊なる御神が降り教会が形づくられ、この世界にイエス・キリストの証が宣べ伝えられる時代が来ました。聖書では、使徒言行録と使徒達の手紙によって記されています。この時代は、主イエス・キリストが、天に行かれるのと同じ有様で再びこの地上に来られる、キリスト

再臨の時まで続くと言われており、「**聖霊の時代**」とか「**教会の時代**」と呼ばれています。私達が生きている2022年1月30日も、この「**聖霊の時代**」「**教会の時代**」の一日です。今日の聖書は、その始まりを描いています。

2 主の昇天

天に昇った主イエスは、雲に覆われて見えなくなった、と聖書は語ります。聖書で「雲」と言えば、神が顕れたことを示すシンボル、天の御神が迎えに来られ、主イエスをご自身の御許に引き寄せたので、使徒たちから主は見えなくなりました。十字架の絶望が三日後の甦りで大きな喜びと変わってからまだ二か月も経っていません。これからもずっと一緒だと思っていた主イエス、自分達を愛し抜いてくださる救い主が自分達から離れて姿を消した、使徒達が呆然と空を見上げていても致し方ない事です。天の父なる御神は、使徒達を憐れに思われたのでしょうか、御国の輝きをまとったみ使いを二人、遣わして、使徒達に伝えます。「**ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。**」

主イエスの姿を探して天を凝視する使徒達は、過ぎ去り二度とはめぐりくることがない過去を追い求めていました。そんな彼らに二人のみ使いは、イエスが再び来られる時を告げ、彼らの眼差しを、将来を目指して歩む現実へと向けさせたのです。

次にルカは、主イエスが昇天されたのは、「**オリーブ畑**」と呼ばれる山であったことを明かします。これは、ゼカリヤ書にあるメシア再臨の時、終わりの日の預言を暗示している、と言われます。「**その日、主は御足をもって／エルサレムの東にある／オリーブ山の上に立たれる。オリーブ山は東と西に半分に裂け／非常に大きな谷ができる。山の半分は北に退き、半分は南に退く**」(ゼカリヤ書14:4)。更に、ルカは「**この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある**」と当時の安息日規定に触れます。神の民が神の安息に与ることを目的とした戒めです。ルカはなぜわざわざ、オリーブ山や安息日規定を記しているのでしょうか。なくても話の筋はきちんと通るのに。

ルカは、旧約の神と神の民の日々も、主イエス・キリストの宣教、十字架と復活、昇天、そして、この後の使徒達のイエス・キリストの証人としての日々も、遠い昔から始まり終わりの日に向かって進む神の救いの歴史の出来事である事を、読者に気づいてほしかったのではないかと思います。「この使徒言行録を読み、神を礼拝する一日もそうだし、神を見上げて歩むあなた方の一日一日も、神の救いの歴史を造り上げるかけがえのない一日なのです」と、ルカが私達に語りかけているようです。

3 自由な群れ

そして、ルカは、11人の使徒達の名前を挙げています。彼らは、主イエスがまだガリラヤにおられる頃、一晩中、山で一人祈って選んだ人々です。その十一人の使徒達の次に名

前が挙がっているのは、14節、「婦人たち」です。主がガリラヤで宣教されていた頃から共にいて、身の回りの世話をしていた女性たちだ、と言われていました。彼女たちが、「イエスの母マリア、またイエスの兄弟たち」つまり、主イエスの血縁者よりも先に挙げられているのは、当時としては異例な事だと言われていました。2000年前の古代世界は、女性の地位がとても低い家父長制社会でした。それは、使徒達のリストの中にも「〇〇の子」とある通り、血縁を重んじる社会でもあります。この場合、イエス・キリストの肉親がリストの先頭に出てくるのが当時の常識だったでしょう。しかし、ルカは、主イエスの肉親たちを使徒達だけでなく、社会的に一人前の人間扱いされていなかった女性たちの後に記しています。13節から14節の祈る群れのリストは、古代世界に記されたものとは思えないほど、非常に革新的なリストなのです。人間社会の硬直したヒエラルヒーに囚われない、神によって集められた自由な群れの姿がここに描き出されています。

4 神を神とする祈り

このように実に様々な人々が、社会常識にとらわれず自由に共にいる事ができた、それも主イエス・キリストあってこそ、でありましょう。多くの様々な人々をまとめていた扇の要のような主はもういません。使徒達はさぞや途方に暮れた事でしょう。主イエスなしには、何一つなしえない、自分達の無力に、歯ぎしりしたのではないかと思います。無力な群れは、いつ滅びてもおかしくない存亡の危機にありました。

しかし、主イエスは愛する弟子たちの為に、彼らが何を為すべきかを示しておられました。先ほど賛美した159番の讚美歌3節には、「父なる御神と 共にしあゆみ、いのちとほろびと わかるる道の しるしを残して」主イエスは天の御父のもとに挙げられた、とある通りです。この「命と滅びとの分かれ道、どちらに進むべきかの道標」こそ、使徒言行録第1章4節の主の言葉。「エルサレムを離れず、前に私から聞いた、父が約束されたものを待ちなさい」という命令でした。この主イエスの言いつけに彼らが従うかどうか、聖霊が降るかどうか、救いの歴史の新しい時代がやって来るかどうか、がかかっていたのです。父なる御神は、ご自身の救いの歴史を、使徒達に委ねられた、すごい事だと思います。

そして、逆説的ですが、使徒達はじめ弟子たちが、自分達の無力を知り、その弱さに呻いていたからこそ、主イエスの言いつけを思い出し、これを守る事ができたのだと思います。もし、彼らが、自分達の無力に気づかず、従って主の言葉を思い出さず、必死に父なる御神と昇天の主に祈ることがなかったら、彼らは主イエスの証人となる事もできなかったでしょう。それは私達にも言えることです。何故なら、使徒達と私達が証するように、と求められている主イエスご自身こそ、十字架の上に徹底的に無力な者となられた方だからです。磔られ苦しみを抜き、しかし、尚、神を求めて叫びをあげられたのが主イエスです。神の御子が、私達と同じ人間となり、私達がとても落ちる事など耐えられないような深い淵に一人おりてくださって、そこで叫びをあげ、祈ってくださった。この御子の叫びに支えられるようにして、使徒達は、私達は、父なる御神に祈り求めることができるのです。

この時の使徒達の祈りは、先ほど読み交わした詩編130篇の詩人の祈りに通じるものがあったでしょう。「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。主よ、この声を聴きとってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。」この使徒達のように、自分達の無力に直面し神にあげる祈り叫びこそ、真に神を神とする事ではないでしょうか。それは、救い主待望の時代の民、旧約聖書の民が繰り返し語っている事です。

私達人間のそのままの心には、「自分達の思うように生きたい、自分達を神として生きたい」という欲望が根を張っています。旧約の民は、自分達の心の中心にある、神を神とできない思いを創世記の誘惑物語に描きこみました。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」という蛇の問に、「苑の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」と答えるエバ。彼女を、蛇が誘惑する次の言葉に人間の根源的な欲求が描かれています。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のようになることを神はご存じなのだ」。「その実を食べれば、神のようになる。」蛇は、エバやアダムの中に根をはる密かな熱望を口にしたのです。彼らには決定的な言葉でした。だからエバは、「蛇の言っている事は本当ですか」と神に聞こうとはしませんでした。彼女は聞きたくなかった、神になりたかったから。それは、アダムも同じ。神を神とせず、自分達が神のようになろうとする時、人は神に問いかけようとはしない、祈ろうとはしないのです。

これを逆転させれば、祈りとは、何よりも、神を神として生きたい、と願うときに現れてくるものと言えるのではないのでしょうか。そして、今、無力に呻き途方に暮れた使徒達、女たち、イエスの肉親、そして多くの弟子たちは心を合わせて祈っています。祈りつつ聖霊なる御神がやって来てくださるのを待っています。彼ら、彼女たちの祈りで、教会の時代、聖霊の時代が幕を開けようとしています。

5 祈るならちょっと待たねばなりません

この使徒達の祈りを想う時、待ちつつ祈ることを歌った一つの詩を思い出しました。加藤常昭先生の「黙想と祈りの手引き」という本に収められた詩です。この本で、トゥヴァルドフスキーというポーランドの司祭の「あなたが祈る時、神はあなたの中で息をなさる」という題名を持つ詩集が紹介されています。味わい深い題名です。私が祈る時、父なるみ神の息吹が私に吹き込まれ、私の内に与えられた聖霊なる御神が深く呼吸して、生き生きと力強く働いてくださる、そんな様子を感じさせる素晴らしい題名を持つ詩集です。残念な事に、スラブ語で書かれたこの詩集は日本語には訳されていません。加藤先生がドイツ語訳から一篇だけ日本語に訳してくださいました。次のようなものです。

「祈るなら、ちょっと待たねばなりません。

すべてのものには時があります。

預言者はそれを見抜いています。

絶えずおねだりばかりしているような人は

望みに生きることを止めています。
驚くべきことが熟して実りをもたらすのは
なお将来のこと。
まだ成就していないこと それは必ず出来事となります。
主はそのすべてをご存じです。
夜のただ中にあっても。

忙しがり屋は あんなにせわしくどこへ行くのでしょうか。
愛は信じ 友情は理解します。

待つ事もできないのなら 祈らないでください。」

作者は、ポーランドの小さいカトリック教会の司祭。ポーランドはロシアとドイツという二つの強国に挟まれた小国であり、ナチスドイツやスターリンの厳しい支配を強いられた苦難の歴史を持つ国です。民衆は他国の圧政に苦しむ日々を送ってきました。その民と共に生きた司祭が、彼らに祈りを教える、とても豊かな詩。加藤先生は次のように取り次いでいます。「最後の言葉『待つ事もできないのなら 祈らないでください』。救いが見えない状況で祈るよりほかない人々に声をかけています。『祈りつつまとう、待ちつつ祈ろう。もう辛抱ができなくなって諦めそうになったり、いらだった時は気をつけよう、もう一度座りなおして祈ろう。』『待つ事もできないなら祈らないでください』厳しい言葉に聞こえますが、励ましの言葉。祈りの言葉を失いそうになる厳しさの中に立たされた人の傍らで優しく語りかけています。『祈るなら、ちょっと待たねばなりません。』」その通りだと思います。

私は、今日の聖書で使徒達、女性たち、イエスの母たちが心を合わせて祈っていた、という所からこの詩を想い起しました。愛する主はいなくなった、周りは敵ばかり、約束の聖霊なる御神はいつ来られるか分からない、不安や恐れに囚われる者も中にはいたでしょう、いらだつ者もいたかもしれない。そんな中、人々が思い出したのは主イエスの言葉でした。「あきらめずに祈り続けなさい。求め続けなさい。探し続けなさい、たたき続けなさい。必ず得ることができる、見つけることができる、必ず開かれる。」心くじけそうになる弟子たちを優しく励まし続けた主の言葉でした、彼らが祈り続けることができるように、と一身を十字架に投げうった主の三日目に甦られた輝く姿を想い起す者もいたでしょう。だからこそ、彼らは、聖霊なる御神を求めて心を合わせて祈る事ができたのだと思います。

そんな使徒達の姿を思い浮かべると、仲間と励まし合いながら、祈り続ける事を通じて、私達は、神を待つことを教えられるのだと思わされます。デンマークの神学者・キルケゴールは言いました。「祈りは神を変えるのではない、祈る人を変えるのだ。」祈りは、不安におぼれそうになる者を、落ち着いて神を待つ者へと変えてくれるのです。祈りによって私達が生きている「教会の時代」の幕を開けた使徒達と仲間達の姿が、その事を語っています。そして、祈りつつ待つ事が、主イエスがいなくなり、バラバラになりそうな弟子たちの群れを一つとしました。この使徒達の祈りつつ待つ伝統は、私達の教会にも引き継がれています。私

達も、仲間とともに、主イエス・キリストが再び来られる日を待ちつつ祈る群れなのです。祈りの内に神の御心を求めつつ、祈りで互いに支え合いながら、主イエスを証していく群れです。このように被造物である私達に幸いなる祈る事を教えてくださる天の父なる御神に感謝し、賛美せずにはおられません。